第4学年　総合的な学習の時間　令和７年度　実践版

単元名「未来にのこそう玉川上水プロジェクト」(30時間)

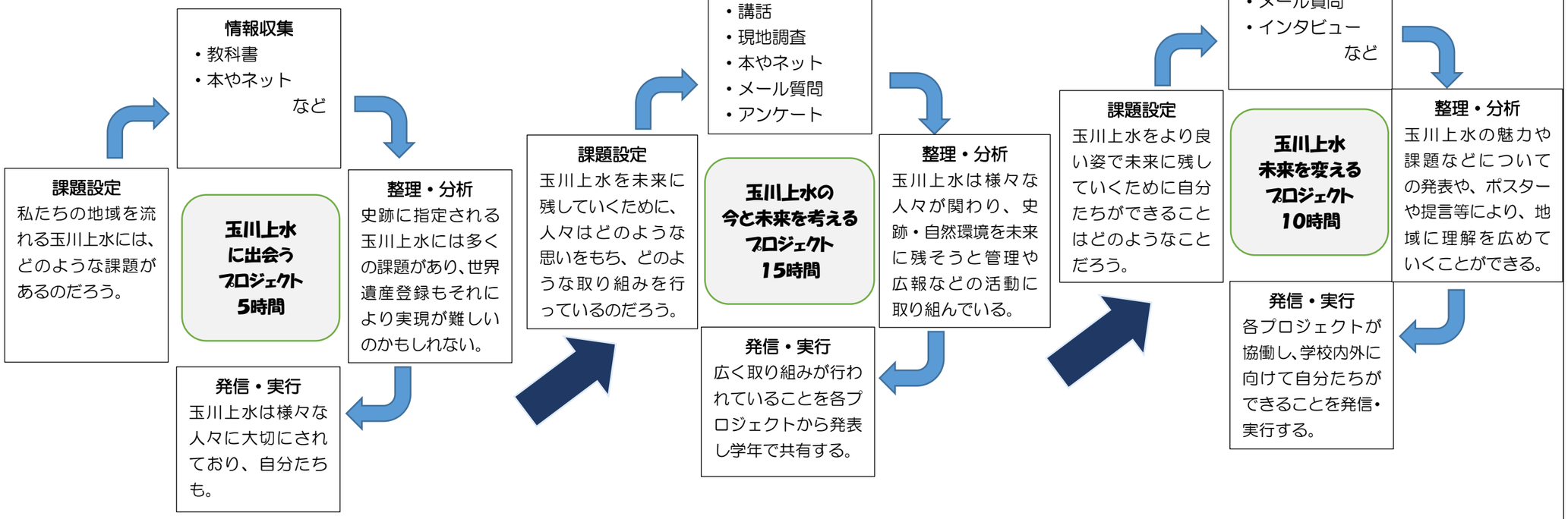
【単元の目標】
児童が玉川上水の抱える課題やその背景、行政や地域の取り組みなどを調べる活動を通して、玉川上水は自分たちの生活と深い関わりがあることを理解し、その解決に主体的に取り組もうとするとともに、自らのこれからの生活に生かしていくことができるようにする。

領域：情報 ・ 環境 ・ 伝統文化 ・ 福祉 ・ 国際理解 ・ 食育 ・ キャリア ・ 安全 ・ 教科横断発展 ・ 地域とのつながり ・ 市民科との関連

◆ 単元を通して育成する資質･能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
①玉川上水が自分の生活や地域と深い関わりがあることに気付けている。 ②玉川上水を未来に残していくために東京都水道局をはじめ、都や市や地域など多くの人々が取り組みを行っており、そこには様々な思いや努力、工夫があることを理解している。 ③探究していく過程において、適切な情報収集の方法を選んだり、整理･分析などに ICT 機器や思考ツールを活用したりすることができる。	①玉川上水の課題を基に探究課題を設定し、解決の見通しを見出しながら、玉川上水をより良い姿で未来に残していくための取り組みを多くの人が関わり、続けていけるにはどうしたらよいか考え、表現することができる。 ②玉川上水をより良い姿で未来に残していくための取り組みとして、調べたり考えたりしたことを明確にしてまとめ、相手や目的に応じて分かりやすく表現している。	①玉川上水の未来に関心をもち、自分の生活や地域を見つめ直し、積極的に探究的な学習に取り組もうとしている。 ②自分や他者のよさに気付き、協働して探究活動に取り組み、課題の解決を進めようとしている。 ③自分も地域の一員であることを自覚し、玉川上水をより良い姿で未来に残していくために自分たちにできることを考え、それらを実践しようとしている。

◆ 単元の指導計画



◆ カリキュラムマネジメント関連

社会科との関連
「とどけよう命の水」
玉川上水が作られた歴史的経緯や玉川兄弟の業績に関する調べ活動を通して、自分たちが暮らす地域の発展は玉川上水の開削に大きく支えられてきたことや現在の玉川上水が果たす役割などについて理解する。

国語科との関連
「もしものときにそなえよう」
自分でテーマを決めて調べることや調べたことをテーマ別に分けてカードに書いておくことで、考えが整理しやすくなることを学ぶ。
「クラスみんなで決めるには」
目的を考えて話し合うことや、参加者同士で尊重し合いながら納得できる話し合いを目指すことについて実践を通じて学ぶ。

特別活動との関連
学級会をはじめ、学級での決め事や検討をする際には、児童主体の話し合いを基本とし、相手の考えを尊重し受け入れながら合意形成をしていく資質能力を養う。

【関連団体･施設】
･玉川上水を守り育てる武蔵野市民の会
･東京都水道局　など

想定される学習の様子

○社会科で学んだ玉川上水が作られた歴史的経緯や現在の玉川上水が果たす役割に関する知識を基に、「現在の玉川上水は人々の憩いの場となっていると学んだけれど、私たちの地域の玉川上水はそのような場になっていないのではないか」という問いが生まれ、それが課題設定につながった。

○この問いは玉川上水の見学をきっかけに生まれ、その後の情報収集と整理･分析のプロセスの中で、国や都や地域に住む人々が玉川上水をどのように見ているかを調べたり、考えたりしていくことでさらに自分ごと化が進んでいき。そこから、「自分たちも玉川上水のために何かしたい」「何ができるのか」という単元全体を貫く課題意識や探究意欲が生まれた。

○児童の思いや願いから課題は以下の3つにまとまった。

プロジェクト A　玉川上水を憩いの場･史跡として大切にする
プロジェクト B　玉川上水の魅力や問題について伝える
プロジェクト C　世界遺産登録を目指す

○地域コーディネーターと連携し、郷土研究家である亀井さんや日本女子大名誉教授の田中さんを招き、玉川上水の基礎的知識や地域での活動、世界遺産登録の難しさなどを学んだ。

○また、公的機関へのメール質問や地域の人々へのアンケートから、玉川上水の保全は多様な人々の思いや考えが反映されそれにより現在の状況が生まれているという理解に至った。

○活動する地域の人々が高齢化していることや、玉川上水が抱える課題の解決には、より多くの人が玉川上水のことを知り、考えていく必要があることに気付き、「自分たちにできることは何か」という新たな課題意識を基に、3くるりん目をスタートさせていくと予想している。

○最後の「発信･実行」は内容がもつ性質から校内だけでなく、広く地域に向けて発信していきたいと児童は考えると思われる。そのため、展覧会の学校公開を主な発信･実行の場と設定し、そこで保護者･地域関係者に向けて活動する計画を児童は互いに協働し合い、教師や関係者の支援を受けつつ実現していくと考えている。